

## 鎌北の孤高の磐座；根深岩

---

---

---

# 『毛呂山町鎌北地区、根深岩』探訪記

平成28年5月12日

『 過ぎ去りし 月見の宴が 懐かしき 孤高の白石 根深岩 』

20-Jun-2016

All rights reserved by Gainendesign Labo. Taizan 2016

Fujisawa-shi Kanagawa-ken Japan

Tel/Fax 0466-43-4713 Email [taizan@gainendesign.com](mailto:taizan@gainendesign.com) HP <http://www.gainendesign.com/>

本探訪記のテキスト、写真の著作権および使用権は概念デザイン研究所山口泰幸にあります。  
無断使用、転載はご遠慮ください。

## 探訪の趣旨

その岩の存在を知ったのはかなり前のことである。私の“巨石閻魔帳”に2010年3月19日の記録が残っているので、少なくとも今から6年以上も前だ。神奈川県から行こうと思えばすぐにでも行ける距離にある埼玉県に、存外足が重くなるのは正直なところ。気にはなりつつも6年間も放りっぱなしではあった。

しかしその後“巨石業界”からは一向にその巨石のことについて伝聞がない。それも不思議な話であるし、秩父周辺の神社にもふと参拝する気になって、ようやく重い腰を上げた次第である。

探訪の対象は「根深岩；ねぶかいわ」といい、埼玉にはとんと疎い私には恐縮ながら初耳の毛呂山町（もろやままち）にある巨岩である。

私がこの面白い情報に行き着いたきっかけは思い出せないが、唯一「根深岩」について記述のあるサイトは

<http://park19.wakwak.com/~hotaru/musa.htm> で『屋根のない博物館（代表；保坂健次さん）』のサイトから『武蔵国一宮成立の前夜 龍籠山を基軸に、だれも知らない方位線』の項を辿れば情報にアプローチできる。このサイトによると、「武蔵国のへそ」という意味深長な仮称を付けられたその岩は大宮は氷川神社の真西にあり、しかも神奈川県の丹沢蛭ヶ岳の北にあたる毛呂山町鎌北地区にあるという。

地図上で当たりをつけてほぼ鎌北湖周辺であることは分かったのだが、そこから先が全く捉えどころがなくなってしまった。どうも人目に触れるような公の場所ではなさそうであり、個人的な調査では限界を感じたため、毛呂山町役場の公式ホームページに直接メールをいれ、「根深岩」の所在を尋ねてみたのである。これは後日分かることになるのだが、役場の観光課でもその「根深岩」についてはあまり知られていなかったようで、しばらくしてから情報を頂いたのである。しかしその内容は極めて懇切丁寧な案内でありしかも詳細なマップ付きであった。毛呂山町役場のご厚意がなければたぶんたどり着けなかったと思う。

さっそく頂いた情報を元にグーグルマップを駆使してその岩の所在を突き止め、ストリートビューでも確認すると、なんと見事にストリートビューに映っているではないか…。いやはや何ともありがたい技術の進化であり、ありがたいグーグルの企業努力である。

「根深岩」はある個人のお宅の裏庭にある柚子畑の頂上に存在していた。以前は別の場所から登れる細い散策路もあったようだがそれも廃れて、今ではそのお宅の庭を歩いて根深岩まで行くしかない。公の目に晒されないはずだし、情報も少ないはずだ。

「根深岩」は地元では「月見岩」といわれているようだ。実際に見ていると「月見岩」の方が、風情からいってもこの巨石を的確に言い表している。詳しくは後述しよう。

今回の探訪記は「根深岩；月見岩」を中心に、その周辺の山や巨石の事情も加味しながら記述してみたい。



## 1 所在地に関する考察

前述の既存情報にあるように根深岩の所在地は確かに氷川神社の真西にある。地図上で氷川神社から東西に真一文字を引くと、鎌北湖のやや北側を貫く。また、根深岩を通る南北のラインはまさに丹沢山塊をかすめるが、実際には神奈川県大磯にある高麗山（湘南平の東隣にある山）の西側を通り、実はそこには既に探訪済みの白岩神社がある。いうまでもなく白岩神社の御神体は神社裏手小山の頂上付近にある白岩そのものである。参考→2010年記 『高麗山・白岩神社探訪記』

<http://www.gainendesign.com/taizan/Kanagawa/K002-Komayama&Shiraiwajinjya.pdf>

今回の探訪の皮切りに、実は埼玉県日高市にある高麗（こま）神社も訪ねており、大磯の高麗山麓にある高来（たかく）神社（これは勿論高麗→高来→たかく という読みの変遷であろう）の御祭神である高麗王若光（こまのこきしじゃっこう）が埼玉県日高市の高麗神社に祀られている。ちなみに高麗王若光はもともと大磯の辺りから上陸し暫く過ごした後、埼玉県日高市（当時は高麗郡）の方へ移られたということである。

厳密には日高市の高麗神社（こまじんじゃ）の扁額には明確に高句麗（句は小さい字で書かれている）神社とあり、正式には高句麗王若光である。すなわち高麗（こま）とは「こうらい」ではなく「こうくり」である。ちなみに韓国読みでは「コグリョ」となるだろう。

大磯町にある高来神社のほぼ真北に日高市の高麗神社は位置する。

## 2 今回のアクセス方法と探訪順路

2014年に公開した「大物主の大岩探訪記」→ <http://www.gainendesign.com/taizan/kotohiraooiwa.pdf> でも言及したが、圏央道がほぼ全線開通したことによって私の在所である藤沢から八王子、あきる野市、そして埼玉県へのアクセスは格段に向上した。2016年5月12日（木）雲ひとつない快晴の早朝6:00にクルマで出発した私は、6:30には八王子分岐点を通過し、7:00頃には既に埼玉県の狭山日高 I C を降りていた。今回のクルマでの探訪拠点はこの狭山日高 I C になる。

今回の探訪はかなり贅沢というか凝集されたもので、走行距離は往復300 kmを超えた。藤沢→海老名 I C →八王子分岐→狭山日高 I C →高麗神社周辺→出雲伊波比（いずもいわい）神社→毛呂山町鎌北湖→根深岩→北向地藏→虎秀（こしゅう）の天文岩→秩父神社・今宮神社→三峰神社→和同・聖（わどうひじり）神社→宝登山（ほどさん）神社→関越道花園 I C →鶴ヶ島分岐→圏央道八王子→海老名 I C →藤沢 が全順路である。今回の探訪記では主にその前半の高麗神社周辺、根深岩、天文岩をレポートする。

高麗神社周辺の探訪

根深岩の探訪

天文岩の探訪

所感





狭山日高IC

スタート地点

圏央道の狭山日高ICを降り、地方道をナビに従って高麗神社へと進む。クルマで20分程度の旅程。  
 高麗神社から毛呂山駅付近の出雲伊波比神社経由で鎌北湖へでる。鎌北湖に來ればもうすぐである。

大磯 地図の出典 ; Google Map © + 筆者による補足付

根深岩のある毛呂山町に行く場合、狭山日高ICから北上へがるのだが、その途中日高市の高麗神社のそばを通るので、当然のごとくこの神社にも立ち寄ってみた。前述のように2010年に神奈川県大磯町にある高麗山の麓の高来神社に行った際、高麗王若光なる人物がその神社に祀られており、最終的には埼玉県の日高市；古くは高麗郷を開拓せんがため一族を引き連れて移住したとあった。果たして、現在日高市には高麗王若光を祀る高麗神社がある。しかも高麗ではあるが後高句麗としての高麗（こうらい）ではなく7世紀に高句麗から国難を逃れて移住してきたのである。従って高麗王若光を祀る高麗神社は高句麗神社であり、まさしく高麗神社の扁額には明確に高句麗神社（句は小さい字）と書かれている。それを直接確認するためもあって参拝した。

高麗神社関連で印象的だったことのみを書いてみたい。

高麗（こま）神社の扁額にはたしかに高句麗神社と記されており、高麗郡（こまごおり）、高麗王若光は7世紀の朝鮮半島高句麗（こうくり；コグリョ）の人であることを改めて確認した。ゆえに、大磯の高麗山も「こまやま」と呼ばれるわけである。つまり高麗（こま）＝高句麗というのが正しい認識で、高句麗国崩壊に伴って若光公を中心にした朝鮮半島からの難民（移民）千数百人が、この地に入り開拓をしてきたということであり、そのことを実感した。

高麗神社の入り口には「天下大將軍」、「地下女將軍」という2柱のトーテムが立っていて独特の雰囲気醸しだしていた。さらにその背景にある小山は極めて大磯の高来神社の裏手の小山；東天照（とうてんしょう）にそっくりで、この小山は円錐形のきれいな形をなしている。また、その頂上には水天宮が祀れている。その小山には登ってきた。

近くには、その形状が巾着（きんちゃく；さいふの一種）に似ているところから巾着田と呼ばれる開墾田があり、ここの雰囲気がすこぶるよかった。また巾着田から仰ぎ見る日和田山はすばらしく、高麗郡一体の精神的な主柱であるといっても過言ではない。

高麗王若光を祀る聖天院という寺があるが、そこには若光公の立像があり、なるほどと思われる人物である。また聖天院が建立される時に山腹から出現した巨大な石灰岩の岩塊はすこぶる圧巻で、石好きには必見の対象である。

補足；高句麗（こうくり）と高麗（こうらい）、高麗（こま）

高句麗（こうくり；コグリョ）は紀元前37年～668年に栄えた朝鮮半島北部から現在の中国の一部占める大国。唐と新羅の連合軍によって滅ぼされた。高麗王若光（こまのこきしじゃっこう）はこの高句麗国の王族で国の崩壊に伴って、一族千数百人を引き連れ、神奈川県の大磯から上陸し、最終的に武蔵国高麗郡に定住した偉人。高麗（こうらい）は918年から1392まで続いた別の国で、通常「こま」という場合は、高句麗をさす。





©2016 Yamaguchi Taikoh @ Gainendesign.com

高麗（こま）神社の大鳥居と美しい背景の小山。  
高麗神社本殿。



©2016 Yamaguchi Taikoh @ Gainendesign.com



©2016 Yamaguchi Taikoh @ Gainendesign.com





©2016 Yamaguchi Taikoh @ Gainendesign.com



©2016 Yamaguchi Taikoh @ Gainendesign.com



©2016 Yamaguchi Taikoh @ Gainendesign.com

高麗（こま）神社の入り口にある二つの特徴的なトーテム  
 右上は背景小山の頂上にある水天宮  
 高麗神社の扁額には確かに「高麗神社」と書かれている。



©2016 Yamaguchi Taikoh @ Gainendesign.com



©2016 Yamaguchi Taikoh @ Gainendesign.com



©2016 Yamaguchi Taikoh @ Gainendesign.com

日和田山と高麗川の麗しき風景。  
右上は巾着田から望む日和田山。  
巾着田の中にある瀟洒な水車小屋。なかなかの風情である。





高麗王若光を祀る聖天院の豪華な山門。



本堂内部と「高麗山」の扁額。



高麗王若光公の立像。



聖天院を建立する際に背後の山から出現した石灰岩の巨大岩塊。

©2016 Yamaguchi Taikoh @ Gainendesign.com





©2016 Yamaguchi Taikoh @ Gainendesign.com



©2016 Yamaguchi Taikoh @ Gainendesign.com

聖天院を建立する際に背後の山から出現した石灰岩の巨大岩塊。 Copyright© 2016 by Taizan @ gainendesign.com





©2016 Yamaguchi Taikoh @ Gainendesign.com

出雲伊波比 (いずもいわい) 神社 (毛呂山町岩井)

高麗神社から15分程度の走行で毛呂山駅近くにある流鏝馬で有名な出雲伊波比神社につく。臥龍山という丘陵上にある。

この神社の御祭神は 大名牟遲神 (おおなむちのかみ・大国主命→大物主神) 天穗日命 (あめのほひのみこと・天照大神の子)  
品陀和気命 (ほんだわけのみこと・応神天皇) 息長帯比売命 (おきながたらしひめのみこと・応神天皇の母—神功皇后) 他16柱  
出雲伊波比神社は山根神社 (毛呂山町大谷木) の兼務社でもある。





出雲伊波比神社の拝殿。右は扁額。  
この神社の佇まいは非常に清涼ですばらしいものがある。





出雲伊波比神社の本殿（国宝）と境内にある八幡宮（品陀和気命）。





鎌北湖の西端にある第2駐車場から約600mで根深岩の麓に到着する。  
 鎌北湖以西の道は舗装はされてはいるもののクルマ1台がようやく通  
 れるほどの狭い道が続く。

地図の出典 ; 国土地理院1/25000地図 + 筆者による補足付





©2016 Yamaguchi Taikoh @ Gainendesign.com

鎌北湖から西へ約600m地点。  
遠方の柚子畑の頂上に根深岩らしき巨岩が顔をのぞかせている。

現在は岩の色がグレーなので周囲にうずもれて見落とすだろう。  
ましてや私有地の一角なので殆どの人がスルーするに違いない。

この辺も道は極めて狭いが、たまたま1台分のスペースがあった。



©2016 Yamaguchi Taikoh @ Gainendesign.com





©2016 Yamaguchi Taikoh @ Gainendesign.com



©2016 Yamaguchi Taikoh @ Gainendesign.com



根深岩の「隣に」あるいは「下に」以前は妹尾社（せのうしゃ）という祠があったそうだ。その祠に祀られていた御祭神は現時点では不明だが（地元で調べるときっと明らかになりそうだが…）、そこから移され、山根神社（毛呂山町大谷木）に合祀されたとある。

このことは極めて重要で、まず、根深岩は御神体の磐座として祀られていたという事実と、それが移されて山根神社に合祀されたこと、そしてその山根神社は出雲伊波比神社によって兼務されているという事実である。

これらから総合的に推測するに、根深岩に鎮まった神は出雲伊波比神社の御祭神と深く関わりと考えられる。私のこれまでの30年近い探訪経験からすると、巨石や磐座に関わる神は、大物主、琴平、熊野などが多く、根深岩の岩質からみてもあきる野の金毘羅神社の御神体である大物主の大岩に近いものを感じる。

参考；「大物主の大岩探訪記」→ <http://www.gainendesign.com/taizan/kotohiraooiwa.pdf>

また、あえて埼玉県入間郡毛呂山町という比較的アクセスしにくい場所に今回“呼ばれた”ということからして、個人的には御神体根深岩には大物主神かその関係（例えば倉稲魂；稻荷）が祀られていたのではないかと思うのである。この辺の探究は是非地元の有志に今後お願いしたいところである。





これが『根深岩』である。高さ約5m、幅・奥行4m以上の巨大な岩塊が忽然とそこに屹立している。岩室は地質図、現物から判断してチャートの一枚岩。この面が真南を向いている。





©2016 Yamaguchi Taikoh @ Gainendesign.com

根深岩正面



©2016 Yamaguchi Taikoh @ Gainendesign.com

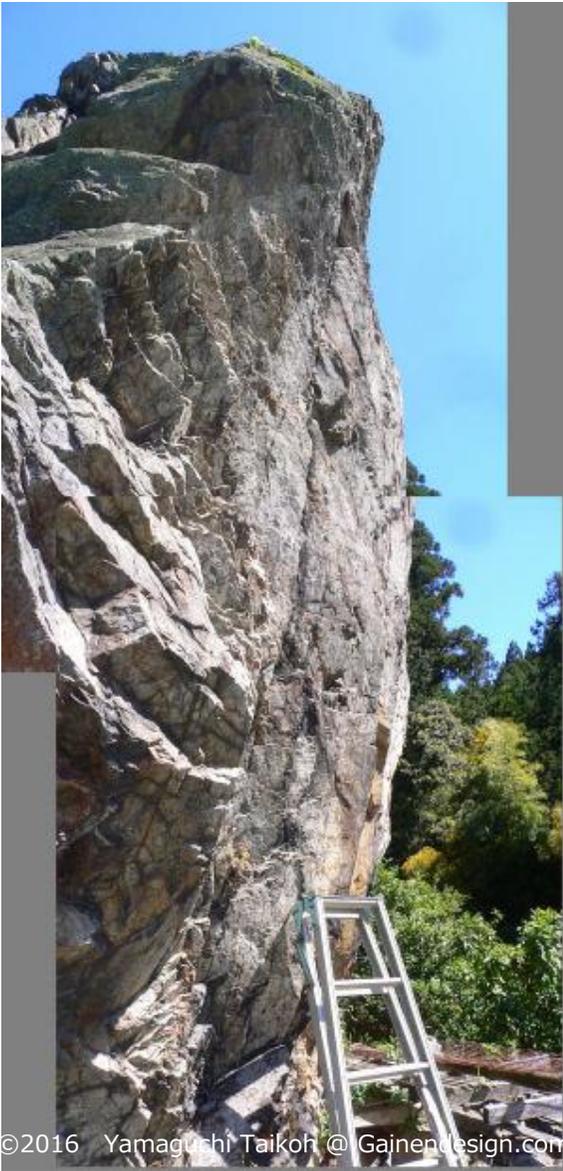
根深岩左側面





©2016 Yamaguchi Taikoh @ Gainendesign.com

根深岩の真南にはお椀を伏せたような小山がある。



©2016 Yamaguchi Taikoh @ Gainendesign.com

西側から見た根深岩。



偶然にも根深岩が裏庭にあるお宅の方と玄関先でお会いすることができ、「裏庭の岩を見せていただきたい」との私のお願いに快く応じてくださり、すんなりと裏庭まで進むことができた。

その存在感は凄く、以前この岩の付近に祠があったことが頷ける。

既にかかなりの風化が進んでいて岩の面はごつごつしてはいるものの、なんとなく「正面」といえる面がある。方位を調べてみるとその「正面」は完全に真南を向いていた。そしてその向かう先には大変姿の美しい小山（名前は分からない）がある。当日は雲一つない快晴に恵まれたので、根深岩越しに見る里山の風景は何とも清々しく心地よいものであった。

地元では実は「根深岩」という名称はあまり著名ではなく、「月見岩」というようだ。実際に満月が彼の小山の上にさしかかり、その月光で根深岩が照らされたなら、なんともいえない情趣溢れる光景ではないか。まさに「月見岩」の方が相応しいと感じ入った次第である。

正面に聳える小山の頂上から、逆にこの岩を見返せば、昼は太陽光に、夜は月光に照り返され、それこそ白く輝く岩であったであろうと想像をたくましくしてしまった。

家の方のお話では、この近辺は実は岩盤でできた台地で、現況では表面に土があり畑はあるものの、少し掘り返せばすぐに岩に出くわすような岩山地帯とのことだった。すなわち根深岩はその岩盤の一部が偶然突出的に地表に残ったもので、巨大岩塊が単独でそこにあるというようなものではない。従って岩盤と繋がっているという意味では根深という命名は的を射ていると思われる。

幸いにも個人宅の裏庭にあることによって、自然風化はあるもののその佇まいのすばらしさは、古き時代より今日までそのまま継承されているといえる。これはたいへんありがたいことである。一方で昔存在した祠がいつの間にか郷の山根神社に合祀され今ではこの岩は御神体としての磐座というよりは、珍しい巨岩という位置づけになってしまっていることは、巨石探訪家としては大変残念でもある。根深岩（月見岩）はいまなお神宿りし“磐座”に違いない。本来ならばこの御神体を社を付帯し永く護りたいものであるが、それが叶わぬならば、なるべく多くの人々が根深岩を御神体として大切に思う気持ちが必要ではないかと痛感する。



根深岩の所在地は鎌北湖入り口（東側）から0.8 Kmほど西進したところにある第2駐車場から、さらに0.6 kmほど西に進むわけがあるが、駐車場からすぐのところまで分岐路がある。根深岩には右路をとる。逆に大師寺方面とかかれた看板のある左路を行くとすぐのところにはほぼ直角に左折道が出てくる。これを上がってゆくと北向地蔵・天文岩へ行ける。

道は舗装はされてはいるもののかなり狭く、しかもワインディングロードになっているので初走行時には結構気を使うことになる。ただし、対向車も追尾車もほぼゼロではあるが…。

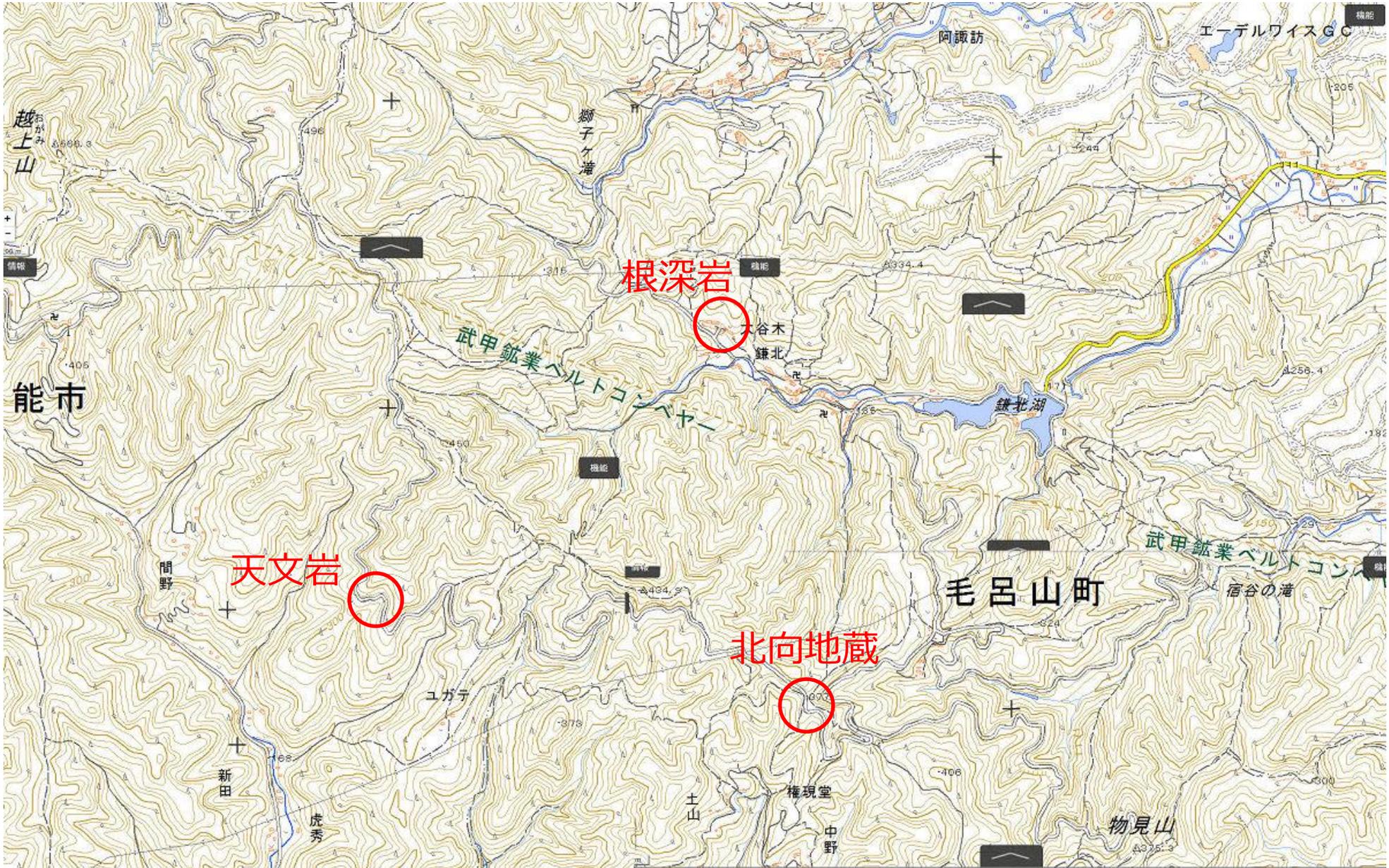
10分から15分位走行すると「北向地蔵」が出現する。「北向地蔵」はここら辺りのハイキングコースの峠道となっており、いくつものコースが交わる場所である。

「天文岩」へはさらにそこから10分以上は歩くことになる。事前に調べておかなければ、こんな山道を果たして進んでいいのだろうかといぶかしく思えるほど、山道は狭く曲がっている。道をもしかして間違えたのではないかと不信感が芽生えたその刹那、突然眼前が開けて明るくなり、右前方に見事な巨岩が出現する。それが「天文岩」である。

天文岩の存在は素晴らしいが、地元でこそ有名であるらしいが、根深岩にも負けずメジャーな存在ではない。埼玉県の巨石では「男鹿岩」、「女鹿岩」の方が名が知られている。しかし実物の天文岩を見ればその存在感に言葉を一瞬忘れるくらいである。この岩には地元の逸話があるので、後段で紹介しておきたい。

天文岩の岩質はまずチャートで間違いなさそうである。これは先述の根深岩とも同じであるし、国土地理院の地質図をみると毛呂山町一帯はチャートの岩盤で覆われている。従って、後から出てくる林道わきの切通しの巨岩も含め、根深岩と同じチャートであると考えられる。すなわちこの一帯はチャートの岩盤でできた岩石山で、その上に長年かかって土が堆積し、森が育成された…そんな地域である。





地図の出典；国土地理井1/25000地図 + 筆者による補足付





©2016 Yamaguchi Taikoh @ Gainendesign.com



©2016 Yamaguchi Taikoh @ Gainendesign.com



©2016 Yamaguchi Taikoh @ Gainendesign.com





天文岩は巨大である。高さが優に10mはあり、幅・奥行も同程度のスケールを持つ。しかもチャートと考えられる一枚岩である。それが狭い林道の一隅に忽然と姿を現す。壮観としか言いようがない。

チャート層で形成されているため風化が進み、いくつかの岩の割れ目がコンクリートで補強されている。地元の人もこの記念物を保持する努力をされているようだ。そのコンクリート補修の溝に小さめの岩をはめ込んでいるために、一見すると梯子が数条渡されているようにも見える。

天文岩の岩質は、先述の根深岩と同じであり、両者ともにチャートの巨大岩盤できたこの周辺の丘陵の上に奇跡的に飛び出て残存しているものと考えられる。天文岩は林道の脇にあり、物語性が付随するために根深岩よりも遥かに著名にはなっているが、存在の重要性はどちらも同等といえる。また、根深岩はその所在が毛呂山町鎌北地区にあるのに対して、天文岩の所在は隣の飯能市にあるため、両者が一貫性を以て取り上げられることも少なからうと推察される。しかし、両者は本来は一体的に語られるべきものであろう。

天文岩には人が入れる比較的大きな隙間があって、この中に入って勉学に励んだ地元の偉人もいる。これは後段にて。

天文岩の右側にはきちんと整備された天文霊神社が建立されていて、現在でもしっかりと祀られている。きっと古代には根深岩もこのような祭祀が行われていたに違いない。





©2016 Yamaguchi Taikoh @ Gainendesign.com

### 天文岩の案内文

『この岩は天文岩と呼ばれ、天文学者千葉歳胤がこの大岩窟に入り、数学、暦法、天文について独学したといわれています。千葉歳胤は正徳三年（1713）、虎秀（こしゅう）に生まれ、生まれつき賢く勉強家でした。

江戸にのぼり中根元圭という当時将軍吉宗に仕えていた数学や天文の大学者に学び、またその高弟である幸田親盈に師事し、その学問の奥義を極めました。

歳胤は蝕算活法率185巻および皇倭通歴蝕考3巻など、数多く著書を残し、晩年は江戸を去り、虎秀の山里に帰り、ゆうゆう自適し、寛政元年77歳で没しました。』



©2016 Yamaguchi Taikoh @ Gainendesign.com





©2016 Yamaguchi Taikoh @ Gainendesign.com

天文霊神社から見た天文岩と鳥居。



©2016 Yamaguchi Taikoh @ Gainendesign.com

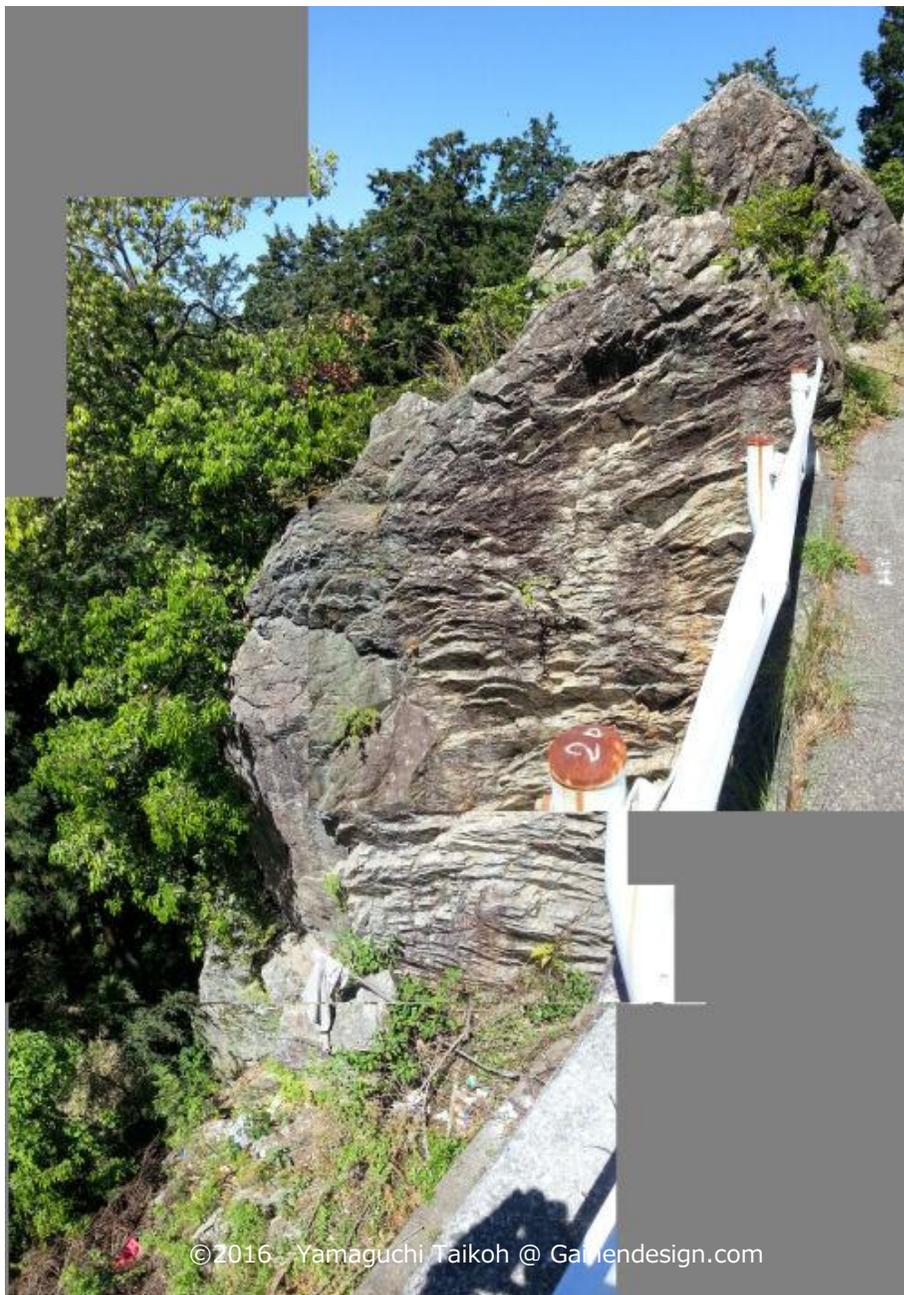
天文岩中央の大きな隙間の上部。



©2016 Yamaguchi Taikoh @ Gainendesign.com

この隙間に入り千葉歳胤は勉学をした。





©2016 Yamaguchi Taikoh @ Gainendesign.com

天文岩は北向地藏から吾野に抜ける長い林道を5~6Kmほど西進したところにあるが、そこからさらに車で数分走ると天文岩と全く同じような巨岩が林道の左側に出てくる。実際にはこの巨岩の上部を切通して林道が走るため、見栄え的には林道からその巨岩を見下ろす形になる。岩質は天文岩と同じである。スケールの際にはこの無名の巨岩の方が天文岩よりも巨大である。要するに、そういう地形なのだ。

当日はここから10分程引き返し、途中右折しながら、さらにさらに狭い林道を南進し、東吾野への近道を通って、国道299に降り、秩父方面へと向かった。



©2016 Yamaguchi Taikoh @ Gainendesign.com



どちらかといえば関東の中でも埼玉県は巨石探訪の空白地帯であり、これまであまり関心がなかったのが偽らざる心境である。強いていえば、聖山としての武甲山、聖地としての三峰神社、秩父神社、宝登山神社辺りが気にかかっていたのは事実であるが、日帰りにはやや遠い距離でもあり、かなり腰が重かった。

そういう中でも「関東の臍」だと記憶していた根深岩はここ数年なんとなく気にかかっていた。自分の体調もかなり回復し、圏央道もほぼ全線開通したこともあって、思い切って天気の良い日を厳選しつつ2016年5月12日（金）に探訪の旅に出た。

行くとなると色々と色気が出てきて、あそこにもここにも行きたいということになり、自宅を6時台に出発し、全経路300 km・12時間の長丁場の探訪ドライブとなった。今回の探訪のメインテーマは根深岩なので、この探訪記ではそこに絞って記述することにした。

根深岩の所在地は数少ないネット情報によれば「埼玉県入間郡毛呂山町」にあるという。毛呂山町（もろやままち）を「もろ」と呼ぶのさえも知らなかった私には、根深岩の正しい所在地を特定することから始めなければならなかった。毛呂山町の役場に相談したのもそういういきさつで、個人宅の裏庭にある根深岩は、行きあたりばったりでは決して到達できなかったことと思う。

果たして、根深岩（月見岩）は探訪した甲斐のある、非常に素晴らしい磐座であった。そのときに浮かんだ歌がこれだ。

『 過ぎ去りし 月見の宴が 懐かしき 孤高の白石 根深岩 』

根深岩が毛呂山町の鎌北の地において未永く、大切に保護され慈しまれることを強く願う次第である。

神社の系譜でいうならば、毛呂山駅のそばにある出雲伊波比神社がこの根深岩とも深く関係していると考えられ、その御祭神である大名牟遲神（大国主命・大物主神）を考慮するに、今回の探訪に呼ばれた所以もそこにあるように感じられ、出雲伊波比神社、根深岩、正面の小山、そして天文岩といった全体的な構図で探訪し感得することが重要なことであると思われる。

